

# 学 位 論 文 要 旨

氏 名 津田 由加子

題 目 幼児の造形活動における主体的活動を促す動機づけに関する研究

－保育者と子どもの意識のずれに着目して－

本研究の目的は、幼児の造形活動における「保育者と子どもの意識のずれ」に着目し、実践事例の分析を行うとともに、明治期よりの幼児造形の変遷をたどり、ずれの起こる原因や類型、またずれをどのように捉え修正しようとしてきたのかを考察すること、そして、ずれを修正していくための有効な手段を「動機づけ」に求め、幼児の主体的活動を促す動機づけのあり方を検討することである。

第1章では、まず上田薫の『ずれによる創造性』より、ずれの創造的な意義について確認したうえで、教師と子どもとの間に生じる意識のずれについて、①教師の願いはどのようなものであったか、②ずれの生じた場面、ずれの様相、ずれの類型、そして③教師はずれに対してどう対応しているか、また④教師のずれへの意識はどうか、といった点から実践事例の分析を試みた。結果、保育者のずれへの意識と修正の試みを、①ずれの認識はあるが、修正することを放棄している場合、②ずれの認識はあるが、原因が理解できず修正する方法もわからない場合、③ずれ自体の認識がなく、むしろ自分の理想の作品に近づけたことに満足感を覚えている場合、他にもずれを認めず計画通りに進めていくのが当たり前というように自らの指導を正当化している場合などに、類型化することができた。

第2章では、明治期より現代にいたる幼児の造形教育の歴史を、ずれの生成と修正の過程という視点から概観した。『幼児の教育』誌（明治34年創刊）に掲載された研究者の論文や実践報告から、それぞれの時代に行われていた造形活動の実践を抽出することによって造形活動における保育者と子どもの意識のずれの様相がどのように変化していったのかを検討した。画一的・注入主義的な保育から子どもを主体とした保育へと、ずれの修正・改善が図られてきたものの、幼児造形教育の現状としては、目の前の子どもの実態や幼稚園教育要領の目標を具体化するという視点から活動内容が選定されるというより、マニュアル書に示された内容をなぞる保育や、園で定められた型どおりの保育が行われる傾向が強く、子どもとのずれは拡大されているにもかかわらず、その認識はなく、多くの保育者が見栄えのよい作品を作らせることに満足している状況となっていると考えられる。

教師主導の保育から子どもを主体とした保育への転換には、「動機づけ」への着目が一役を担っていることを確認するとともに、現代におけるずれの状況と改善への方途を示した。

第3章では、教師の指導言とほめ言葉に着目し、実践事例の分析を行うことで、動機づけの現状と課題について検討した。保育者が用いるほめ言葉には①意欲を持たせる、②保育者の考える理想の作品に近づける、③認める・受け入れる、④考え、気付かせるといった意図が含まれており、一方で直接的なほめ言葉だけではなく、比喩的な表現を使って子どもたちを考えさせたり、子どもたちが発言した言葉に共感的な姿勢を示したりといった働きかけが、子どもの動機づけを促していることを確認した。

また、ずれを修正する指導言は子どもの動機づけとして機能すること、そして動機づけは導入段階はもちろん、活動全体を通して様々な場面で有効に機能させる必要があるという課題を確認した。

第4章では内発的動機付けについて、「他者受容感」、「自己決定」、「有能感」、「知的好奇心」という4つの観点から整理したうえで、内発的動機付けに着目した授業実践例の考察を行った。子どもの興味・関心・必要感、子ども意識の流れなどを十分に考えたうえで、①意欲を高める、②必要性を与える、③想像を働かせる、という3つの要素に基づく言葉がけを用いることによって、内発的動機づけが働き、意欲的・連続的な活動が生み出されることが確認された。続いて、6ヵ月間にわたる実践（「新幹線をつくろう」「新幹線を見に行こう」「乗ってみたい新幹線をつくろう」）を、新井の3種の動機づけモデルをもとに考察し、活動に連続性をもたせる動機づけの在り方を示すことができた。様々な場面で動機づけを意識した言葉がけや環境設定などを行うことで、次の活動への意欲が高まり、活動が連続的に展開されていき、以下の成果が認められた。またそれらが相互に作用することで子どもが一層意欲を高め、更に次の活動へと発展していく様子が確認できた。

- ① 経験の連続性が生まれたこと
- ② 造形能力の高まりがみられたこと
- ③ 社会体験活動へと発展したこと
- ④ コミュニケーションの広がりがみられたこと

終章では以下の課題について述べた。

①倉橋は「動物園」や「八百屋」「こいのぼり」など、子どもの興味や関心、生活と結びついた主題を選定し、それを基軸に子ども主体の活動を展開させてゆく「誘導保育」を提唱していたが、現代では子どもを取り巻く環境が大きく変化しているため、現代の子どもたちの興味・関心・必要観に即応し、生活と結びついた主題を選び活動展開を構想する必要があること。

②本研究では子どもの内発的動機付けを促す指導言やほめ言葉の考察を行ったが、作品見本や示範の提示、動作や周辺言語などの指導言以外の保育者のパフォーマンス、また環境設定のあり方など、保育を構成する諸要素について検討し、それぞれ効果的な方法を見出していくこと。

③「新幹線」の実践では、子ども同士、子どもと保護者、駅の職員などとの間でコミュニケーションが活性化することで、子どもの意欲が持続し活動が発展していく様子が観察された。グループ活動などの保育形態や、園外の方との交流など社会と連動した実践の効果について検討すること。